

北海道礼文町における 「保小中高連携教育」の効果と展望 ～校長・教頭・教職員による自己評価をもとに～

古川 碧

●要約

本稿は、北海道礼文町⁽¹⁾における「保小中高」間の連携教育について、実践の主体者である校長・教頭・教職員の自己評価をもとに、その効果と課題・展望を考察することを目的とする。礼文町の連携教育は、その目標、内容、組織等においてきわめて独創性に富む。すなわち、礼文町の地域性を生かし、すべての児童生徒の発達保障を基本に、高校を含め全町一丸となって取り組まれている。また、連携教育の推進母体が礼文町教育研究会であることもユニークである。自ら考え、研究・交流し、実践しているだけに、この連携教育に対する評価は高く、小中学校の校長、教頭、教職員の88%が「成果を上げている」と評価している。今後は、評価の視点をあくまでも児童生徒の変容（成長発達）に据えつつ、自校の教育課程と教育活動・学校運営の改善・充実および各自の職能向上にしっかり結びつけること、さらに、リーダーの育成や高校問題の解決などが求められる。

●キーワード

礼文型連携教育

礼文検定

礼文学

はじめに

2006年から始まった北海道礼文町における保・小・中・高校⁽²⁾間の連携教育は、基礎学力の向上を目指す「礼文検定」⁽³⁾とふるさと学習を創造的に発展させた「礼文学」⁽⁴⁾を二本柱として学校ぐるみ、地域ぐるみで取り組まれ「礼文型」連携教育として進展してきた。

本稿は、こうした連携教育の中核となっている小・中連携教育を取り上げ、実践の主体者である校長・教頭・教職員自身が連携教育の現状や課題をどのように認識・評価しているかということと、連携教育が各学校の学校経営や一人一人の教育活動や職務にどのような影響を与えているのかを検証するのが目的である。また、その検証に基づき今後の課題と展望について考察する。

本調査は、以上の見地から実施し、その結果について考察したものである。

I. 調査実施の概要

- .1. 調査目的 礼文町における学校種間連携教育、とくに、中核となっている小中連携教育の現状と課題および学校経営や教育活動等への影響を調査することにより、学校種間連携教育の発展および学校経営や教育活動の改善・充実に資する。
- .2. 調査内容 小中連携教育の内容と評価（設問数12）
- .3. 調査対象 礼文町立小中学校に勤務する校長・教頭及び教職員（対象者数6校57名）
- .4. 調査方法 あらかじめ示した項目に回答。学校種、職種は記入。氏名は無記名。
- .5. 調査期間 2011年11月16日から2011年12月5日まで。（回答期限12月5日）

II. 調査結果の概要

- .1. 回収率 87.7%（50名/57名）
- .2. 回答者数 小学校（校長4名、教頭3名、教諭12名、養護教諭3名、事務職員2名）
中学校（校長2名、教頭2名、教諭18名、養護教諭2名、事務職員2名）
- .3. 調査結果の数値等
回答欄の数値は%、小数第2位を四捨五入したため、合計が100%にならない項目がある。
なお、職種によっては調査対象者の人数が少ないため、評価結果の数値（%）が実際に人数より大きな印象を与えている場合がある。
- .4. 調査結果の主な概要
 - (1) 礼文町全体で取り組まれている「保・小・中・高」間の連携教育について、「大変成果を上げている」、「少し成果を上げている」の合計は、88.0%であった。
 - (2) 本校で取り組んでいる「小・中連携教育」について、「大変成果を上げている」、「少し成果を上げている」の合計は78.8%であり、「どちらともいえない」が20%、「あまり成果を上げていない」が、2.0%であった。
 - (3) 自分の職務との関係では、「大変良い影響を受けている」、「少し良い影響を受けている」の合計が、64.0%であった。「どちらともいえない」は、28.0%、「あまり良い影響を受けてない」は、2.0%であった。無回答が6.0%あった。
 - (4) 全町的な連携教育と本校の取り組みの比較では、「大変成果を上げている」、「少しは成果を上

げている」の合計が、全町88.0%、自校78.0%であった。「どちらともいえない」は、全町が6.0%、自校が20.0%であった。

Ⅲ. 「礼文型」連携教育の概要

Ⅲ.1. 連携教育の歩み

「礼文町の連携教育は、2005年に開催された礼文町合同研究大会（礼文町教育研究大会と宗谷管内複式教育研究大会の合同開催）が出発点である。元地小、尺忍小に続き、内路小、上泊小の廃校が決定する中、当時の4複式校を公開研究校にして、町内の教育関係者、保護者、地域の支援と、町内全ての教職員の力あわせによって大会を成功させることができた。」⁽⁵⁾ この大会を契機に全町的な連携教育実施の機運が高まり、2006年1月に、礼文町校長会が提案した「保小中高による礼文町教育連携骨格案」^(概要)～礼文町研を推進母体に12年間一貫教育を～をもとに「第1次実践研究3ヶ年計画」が策定された。

2007年度には、町内全小中学校において礼文検定や小中高一斉クリーン作戦、観光大使活動などが実施され、ピスカ小ホールで礼文学発表会が行われた。

2008年度には、礼文高校が礼文町教育研究会に正式加入するとともに、保育所の協力も得て、「礼文検定」や「礼文学」^(総合的な学習の時間)、生活指導等を連携課題とした「保・小・中・高連携教育」の第1次研究活動^(3ヶ年計画)が開始された。また、香深地区には、小中連携を推進するための母体となる組織として「小中交流推進委員会」が設置され^(船泊地区は「船泊地区教育連携推進小中連絡会」2009、その後、両地区とも「小中連携教育推進協議会」に名称変更)、小中連携教育が一層活発に展開されるようになった。

2009年度からは、基礎学力の定着を目指す「礼文検定」、ふるさと礼文に学ぶ「礼文学」、学校間交流および連携を課題とした「第2次3カ年計画」による連携教育が全町的に取り組まれ、今日に至っている。⁽⁶⁾

Ⅲ.2. 連携教育の現状

Ⅲ.2.1. 小中連携教育活動

香深地区では、研修における連携、PTAにおける連携、学習面における連携、地域活動における連携を課題に、その具体的な推進組織として、「英語」、「合唱」、「研修」、「PTA」、「児童生徒会」、「教師間交流親睦」の各プロジェクトを立ち上げ⁽⁷⁾活動している。英語プロではカリキュラムの実践と研修および中学校での合同授業、合唱プロでは合同合唱練習や香深地区音楽祭、研修プロでは授業公開や体験授業、PTAプロでは連P講演会や地区懇談会、生徒会プロではクリーン作戦や校外班配布活動、親睦プロでは香深地区交流会などを企画し実践している。

船泊地区においては、小学校教育の中で児童の生活面^(身近自立と対人関係)と学習面^(学習規律と各教科内容の到達課題)にわたって「中学校に入学するまでに身につけさせたい30の力」を明示し連携して取り組んでいる。⁽⁸⁾ また、小中学校のPTAとともに「家庭で身につけさせたい12の生活・学習習慣」を取り上げ、家庭と学校が連携して児童生徒への指導に当たっている。⁽⁹⁾ さらに、新たに中学校に着任した教員を対象として「一日小学校先生体験研修」を実施している。この取り組みは、中学校教員が小学校の授業に直接参加^(T-T)するとともに、休み時間や給食などを児童と一緒に体験することによって、小学校における教育活動を直接感じ取り、中学校での授業づくりや集団づくりに活かそうとする

ものである。また、中学校教員が小学校における日常的な指導を体験することにより、小学校から中学校への接続課題を把握し、中学校入学時の指導や教育課程づくりに活かしている。同様の取り組みとして香深地区では、「ドリームマッチ」が行われている。これは、小学校に中学校教員が出向き、T-T 授業を行うというものであり、小学2年生の生活科や音楽、3・4生の社会や算数、5・6生の英語や図工、全校体育などで実施されている。(10)

これらの取り組みは、教員の研修としてもきわめて有意義な実践であり、教員や児童・保護者の評価も高い。(11)

Ⅲ.2.2. 中高連携教育活動

2010年に設立された「中高教育連携推進協議会」において、「どのような中高連携が可能か」をテーマに、中学校と高校の双方が提案し合い、具体的活動として、教師間交流（学力の接続、実践の交流を深める）、生徒間交流（学校行事、部活動、体験入学等、高校の魅力を中学校の活動に組み込む）、PTA・地域の交流（礼文高校の魅力を広く発信することが必要）などの実施について話し合われた。(12) 7月に開催された第2回協議会では、中学校と高校双方でお互いに何ができるかを協議した結果、文化フェスティバルや「はちまる交流会」(13)への合同参加と取り組みの交流、相互の授業参観と交流、中学3年生の担任への高校についての説明、中高の担任レベルでの交流、高校の放送局についての中学生への説明、学校祭などでの高校生の書道作品の展示、中学生向けのパンフやポスターの活用など、できるものから実践化していくことを確認している。(14)

2011年度は、学校案内パンフレットやポスターの作成、体験入学、保護者説明会、高校生の国際交流、町の支援策、eラーニングの導入、中学生へのアンケート、バスケット部や卓球部、学校祭での連携などに取組み、中高の合同授業についても検討されている。

今後の課題として、教員同士の実践的交流（学習指導、生徒指導、職場体験など進路指導、HR経営、防災教育」等、出前授業の具体化など）、生徒同士の交流（学校行事や地域行事を通しての交流、合同授業や部活動交流など）、保護者へのPR活動（広報「れぶん」、礼高だより、学校PRパンフ・ポスター、学校説明会、個別進学相談の検討など）高校への進学指導に関わる中高連携の深化（情報交流、交流を通して双方の教育活動・進路指導を理解）などが挙げられている。(15)

Ⅲ.2.3. 保小、保中連携教育活動

香深井小学校を例に挙げると、運動会や学芸会、お遊戯会などの行事において、保育士と小学校の教員が相互に訪問し合い子どもたちを励まし成長を見守っている。ここには、中学校や高校の教員も参加している。また、連携の出発点でもあるお互いに知り合う活動として保小中の教職員による交流会が行われている。児童と園児の交流では、小学生は、春になると保育所の子どもたちにやさしく教えながら一緒に花壇の苗植えを行い、冬には、小学生が園児を招待して「お祭り広場」で心の交流をすすめている。(16)

中学校と保育所の連携では、入園式や卒園式などの保育所行事に、中学校長が出席したり、職業体験で中学生が保育所に行きその生徒がお遊戯会などのお手伝いをしたり、家庭科の授業で保育実習を行ったりしている。

Ⅳ. 連携教育の効果と課題

礼文町においては、前述したように「手づくり」の豊かな連携教育が展開されている。これらに対

する小中学校の校長、教頭、教諭、養護教諭及び事務職員による自己評価は次のとおりである。

Ⅳ.1. 総括的評価と学校種別・職種別評価

はじめに、礼文町全体の連携教育に対する評価を見る。なお、設問1（「連携教育の具体的内容」）については、上記の2.「連携教育の現状」を参照されたい。なお、設問4（礼文町全体の連携教育が、「あまり成果を上げていない」、「まったく成果を上げていない」理由）については、回答者がいなかったため記載していない。また、設問11（小中連携教育の課題）については、設問12（礼文町全体の連携教育の課題）と同内容のものが多かったため、設問12の回答のみを記載した。

【設問2】礼文町全体の「保小中高連携教育」についての評価

① 校長・教頭・教職員全員による評価

ア	大変成果を上げている	40.0
イ	少し成果を上げている	48.0
ウ	どちらともいえない	12.0
エ	あまり成果を上げていない	0.0
オ	まったく成果を上げていない	0.0

（単位は％）

・礼文町の小中学校の校長、教頭、教職員の約9割が連携教育の成果を認めている。

② 学校種別による評価

勤務する学校種別による礼文町全体の連携教育についての評価結果である。

項 目	小	中
ア 大変成果を上げている	41.7	38.5
イ 少しは成果を上げている	54.2	42.3
ウ どちらともいえない	4.2	19.2
エ あまり成果を上げていない	0.0	0.0
オ まったく成果を上げていない	0.0	0.0
無答	0.0	0.0

（単位は％、四捨五入のため合計が100にならない場合がある）

- ・小学校勤務者と中学校勤務者を比較すると小学校勤務者の方が「成果を上げている」と回答した者が多い。中学校勤務者では「どちらともいえない」と回答した者が多い。
- ・「どちらともいえない」理由を問う質問は設けておらず、したがって、その理由は不明であるが、1名だけ「初任校だから」と記述していた。

③職種別による評価

勤務する学校種別ではなく、職種別による礼文町全体の連携教育に対する評価である。

項 目	校 長	教 頭	教 諭	養護教諭	事務職員
ア 大変成果を上げている	83.3	80.0	26.7	20.0	50.0
イ 少しは成果を上げている	16.7	20.0	60.0	80.0	0.0
ウ どちらともいえない	0.0	0.0	13.3	0.0	50.0
エ あまり成果を上げていない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
オ まったく成果を上げていない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
無答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

(単位は%)

- ・回答した校長、教頭の全員が、「大変成果を上げている」または「少しは成果を上げている」と回答している。
- ・教諭以外は調査対象者数が少ないため、結果の数値(%)が実際の人数より大きな印象を与えている点に留意する必要がある。

【設問3】礼文町全体の連携教育の具体的成果

- ・教職員のつながり、仲の良さ、生徒や先生の顔がわかる。
- ・小は中・高のこと、中は小・高と、高は中・小の先生方と気兼ねなくいろいろなことが相談でき、それぞれの学校のことがわかる。また、それを自分の学校の教育に生かそうと考えている。
- ・子どもたちの実態を共通認識できるようになった。
- ・保育所との連携も以前より進んでいるのではないかと思います。
- ・保、小、中、高で1つのまとまりで教育ができている。教職員の連携から子どもたち、保護者の連携となり相乗効果を上げている。
- ・礼文検定(基礎学力)の取り組みを小学校で行うことで、中学生になっても抵抗感なく行うことができる。また、普段の授業についていけないような低学力の生徒でも目標を持ち続けることができる。
- ・教科指導で連携が図られている。
- ・高校の先生方とサークル活動や研究大会で一緒にできること。専門性の高い話が聞けたり、高校の授業を参観できたりするのがいい。
- ・礼文学では、系統表を作成したことで、他の学校の取り組みがわかり、自校の計画にも役立った。
- ・礼文検定、クリーン作戦、観光大使活動などがスムーズに行われるようになった。
- ・高校選択の資料となる。(地元に進学したがいらない生徒も多いが、高校生の発表を聞いたり、高校生の説明を受けることで検討しようとする。)
- ・性教育系統表を作成し、9年間通して指導できている。
- ・小中高の性教育を関連づけて12年の流れをまとめたいという思いから「性教育系統表」を作成した結果、各校の性教育の内容や流れ、実施状況がよくわかり、より効果的な指導につながった。
- ・設備、備品関係の共通的な要望を取りまとめることができた。(予算要求)

- ・礼文町の抱える教育環境整備の課題が共通になっている。
- ・中学生が小学生のお手本となり頑張る姿がみられる。
- ・小学生が中学生になった時に違和感なく生活することができる。(中1ギャップの解消)
- ・地域全体から学校、生徒が応援されている実感がある。(たくさん来校してくれる。)
- ・礼文町全体で子どもたちを見ていくという姿勢がある。

【設問5】 自校で取り組んでいる「小中連携」教育についての評価

① 校長・教頭・教職員全員による評価

ア	大変成果を上げている	42.0
イ	少しは成果を上げている	36.0
ウ	どちらともいえない	20.0
エ	あまり成果を上げていない	2.0
オ	まったく成果を上げていない	0.0

(単位は%)

- ・「大変成果をあげている」または「少しは成果を上げている」の合計が78.0%であった。
- ・「どちらともいえない」が20%、「あまり成果を上げていない」が2%であった。

② 学校種別による評価

勤務する学校種別による自校の連携教育に対する評価である。

項 目	小	中
ア 大変成果を上げている	45.8	38.5
イ 少しは成果を上げている	33.3	38.5
ウ どちらともいえない	20.8	19.2
エ あまり成果を上げていない	0.0	3.8
オ まったく成果を上げていない	0.0	0.0
無答	0.0	0.0

(単位は%、四捨五入のため合計が100にならない場合がある)

「成果を上げている」または「どちらともいえない」という項目についての小中の違いはほとんどないが、中学校において「あまり成果を上げていない」という回答があった。

③ 職種別による評価

勤務する学校種別ではなく、職種による自校の連携教育に対する評価である。

項 目	校 長	教 頭	教 諭	養護教諭	事務職員
ア 大変成果を上げている	83.3	60.0	33.3	20.0	25.0
イ 少しは成果を上げている	16.7	20.0	40.0	40.0	25.0
ウ どちらともいえない	0.0	20.0	23.3	40.0	25.0
エ あまり成果を上げていない	0.0	0.0	3.3	0.0	0.0
オ まったく成果を上げていない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
無答	0.0	0.0	0.0	0.0	25.0

(単位は%、四捨五入のため合計が100にならない場合がある)

- ・校長は全員が「大変成果を上げている」または「少しは成果を上げている」と回答している。教頭に「どちらともいえない」という回答があった。教諭では、アまたはイと回答した者の合計が73.3%で、「どちらともいえない」が23.3%、「あまり成果を上げていない」が3.3%であった。
- ・教諭以外は調査対象者数が少ないため、結果の数値(%)が実際の人数より大きな印象を与えている点に留意する必要がある。

【設問6】 自校で取り組んでいる小中連携教育の具体的成果(設問3と同内容のものを除く)

- ・生徒も教師も気軽に小中間で交流でき、お互いに高め合っている。
- ・子どもたちを「一緒に育てていく」という意識ができた。
- ・先生方の連携の機運が高まっている。
- ・一般の先生方から「こんなことが可能なのでは？」とアイデアが出され計画・実現されている。
- ・授業交流や出前授業、合唱講習などで授業技術が共有できる。
- ・小は中のことを、中は小のことを考え、また、小・小、中・中で連携できるものはないか考えながら日々過ごしている。内にこもるのではなく、外に発信しながら、また、刺激を受けている。

(ドリームマッチは、本当に良い刺激になった。また、町研で中学校に行くと、他の中学校の雰囲気などがつかめる。)

- ・小学校としては、中学校の様子がよくわかり、小学校の実践に生かすことができる。
- ・中学校に上げるまでの取り組みが変わった。中学校に行った子がかかえているような課題などから、小学校までに取り組んでおかなければならないことを考えるようになった。
- ・小学校の時にどんな指導をしたのかを小学校の先生と交流することができるので、教科指導や学級指導に役立っている。
- ・外国語(英語)活動、小中合同合唱、小中音楽祭、中学校教員の乗り入れ(ドリームマッチ)、PTA子育て勉強会、PTAミニバレー大会、校外班配布活動、年2回の親睦会などを通して、児童生徒、教職員、保護者の顔と名前がわかるようになった。
- ・学力が向上した。
- ・中学生が小学生との交流を通して、心の成長が見られた。
- ・子どもたちが自然に関わり合いができるようになってきている。小学生が中学生の姿を見て、「こんな中学生になりたい」と思うようになってきている。あるいは、中学生になったらこんな活動をする

るんだと分かるようになっている。

- ・クリーン作戦等での児童、生徒の校区内での協力関係ができる。

【設問 7】 自校の小中連携教育が「あまり成果を上げていない」理由

- ・「礼文検定」、「礼文学」で学習の交流はできているが、学習方法の連携ができていない。家庭学習、何をどうやって学習するのか等、鉛筆を正しくもてる生徒もほとんどいない。
- ・学校単位での成果はまだ見られない。

【設問 8】 自分の職務と自校の「小中連携」教育の関わり

① 校長・教頭・教職員全員による評価

ア	大変良い影響を受けている	38.0
イ	少し良い影響を受けている	26.0
ウ	どちらともいえない	28.0
エ	あまり良い影響を受けていない	2.0
オ	まったく良い影響を受けていない	0.0
	無答	6.0

(単位は%)

- ・全町及び自校の連携教育に対する評価と比較すると「良い影響を受けている」という評価が若干低下し「どちらともいえない」という回答が増えている。また、無答があった。

② 学校種別による評価

勤務する学校種別による自校の連携教育に対する評価である。

項 目	小	中
ア 大変良い影響を受けている	45.8	30.8
イ 少し良い影響を受けている	16.7	34.6
ウ どちらともいえない	20.8	34.6
エ あまり良い影響を受けていない	4.2	0.0
オ まったく良い影響を受けていない	0.0	0.0
無答	12.5	0.0

(単位は%)

「良い影響を受けている」は、小中の違いはあまりないが、「どちらともいえない」、「あまり良い影響を受けていない」、「無答」の項目に違いがあった。

③ 職種別による評価

勤務する学校種別ではなく、職種による自校の連携教育に対する評価である。

項 目	校 長	教 頭	教 諭	養護教諭	事務職員
ア 大変良い影響を受けている	100.0	80.0	23.3	20.0	25.0
イ 少し良い影響を受けている	0.0	0.0	33.3	40.0	25.0
ウ どちらともいえない	0.0	0.0	36.7	40.0	25.0
エ あまり良い影響を受けていない	0.0	0.0	3.3	0.0	0.0
オ まったく良い影響を受けていない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
無答	0.0	20.0	3.3	0.0	25.0

(単位は%、四捨五入をしているので合計が100にならない場合がある。)

- ・自分の職務と連携教育の関係を見ると、校長、教頭のほぼ全員が「大変良い影響を受けている」と評価しているのに対し、教諭、養護教諭、事務職員の評価がそれぞれの項目に分かれている。ただし、半数以上が「良い影響を受けている」と評価している。
- ・教諭以外は調査対象者数が少ないため、結果の数値(%)が実際の人数より大きな印象を与えている点に留意する必要がある。

【設問 9】 自校の小中連携教育から自分の仕事が「良い影響を受けている」具体的内容

- ・学校経営に連携教育を位置づけている。
- ・9年間の教育課程編成が可能になる。
- ・連携により、学校運営の中に一つのしっかりとした柱ができる。
- ・子どもたちの成長を小中の連携の中で見守ることができるので、保護者の願いとかみ合った学校経営ができる。
- ・よりよい連携をつくり出そうという前向きの意識。(中学校が連携のリーダーシップをとっていこうとする意識が進み全体的な視野で教育活動を考えるようになってきている。)
- ・小学校で頑張ってきたことを土台にして、さらに上を目指した学校経営へとつなげられる点で、今がんばっている連携は継承し、さらに発展させていかなければいけない。
- ・学校組織の活性化につながっている。
- ・保小中高連携は、“教育の可能性”を追及する上で、その土台であり、地域に根ざした学校経営の柱である。地域で育つ子どもたち…連携できていないとすれば、それは学校の責任である。
- ・自分が苦手な分野の場合、専門の先生(中学校)に聞くことができる。(サークル活動を通してなど)
- ・系統表作成により、計画を立てる際に役に立った。
- ・学校研究など共通したものにでき、9年間で子どもたちを見ていける。
- ・いろいろな視点から指導できるようになる。
- ・小学校の実態を踏まえて中学校で指導に当たれる。
- ・英語のカリキュラムを作り上げたり、合同授業をするのはとても良い。
- ・お互いの教育活動を見て刺激を受けられること。
- ・教育活動には、大きな影響がある。例えば、1年担任として、入学前に生徒の名前や様子が詳し

くわかる。(卒業担任の引継ぎより自分の目で確かめられる。)なので、学級経営や学級での取り組みに生かした。

- ・部活動での体験教室。
- ・地域行事の協力。(力合わせ) や子どもとのかかわり。
- ・同校種間、異校種間の交流で教師力向上につながっている。
- ・仲間意識が増え、共に研究同人としての意識が高まった。
- ・教務部研修係として、新たな連携の企画を立てるなど、今後に生かせる連携に向けての活動が活発になった。
- ・研究部が連携して香深地区の理想の子ども像を考えたり、教育課程上の連携について考えることで刺激を受けられること。
- ・事務職員同士でも連携をとり、教育予算の中にも「小中連携費」を計上し、各種活動において執行している。

【設問10】 自校の連携教育から自分の仕事が「あまり良い影響を受けていない」理由

- ・若い先生が多く、自分の仕事の時間を十分に取れていない。
- ・「礼文検定」、「礼文学」で学習内容の交流？はできているが、学習方法の連携ができていない。家庭学習で、何をどうやって学習するのか等、鉛筆を正しくもてる生徒もほとんどいない。この内容は毎年あがる課題だが、一向に改善されない。

【設問12】 礼文町における「保・小・中・高」連携教育の課題

設問は、「小中連携」と「保小中高連携」を分けたが、回答はほぼ同趣旨の内容だったので「保小中高連携」について記述のあったものを掲載する。

- ・現状を交流し合うのみでおわっているところがある。(保・小)
- ・1年間や、長い目でどうしていくかを計画していく必要がある。
- ・保・小間では、「幼」ではないので、学習面での連携は強くのぞめない。
- ・時間の確保と個人負担の軽減か？
- ・保育所とのつながり。
- ・高校存続のためにも、中高連携のさらなる工夫が必要。日常からの関わりを持ち、地元高校の良さを中学生に知らせる工夫。
- ・保・高との関わり方、小中は密度が濃い。
- ・高校や中高連携にどこまでリーダーシップを発揮できるか。
- ・保・小、小・中だけでなく、他のつながりも深くなればよいと思う。
- ・一般教員が町研の活動に対して課題意識を持続けられるかどうか。
- ・保中、保高、小高の連携。
- ・礼文高校への進学。
- ・保育所に行っていない子どもの把握。
- ・連携を始めたころの熱意を今いる人たちがちゃんと引き継げるのか、また、活動のねらいをしっ

かり持つこと。

- ・地域間、学校間の熱意の差があると思う。
- ・より具体的な（目に見える形）での連携した取り組みの充実。
- ・保・高との連携が弱い。
- ・教職員が変わっていく中での基本方針の引きつぎと発展。
- ・観光大使活動など、ひとつひとつの取り組みは大変よいが、連携する中で「足並みを揃えよう」としているのか、あたらしい独創的な取り組みが少ないように思う。（毎年観光客にアンケートを取っている。）各校の児童生徒の実態によってつきたい力、伸ばしたい力は異なるだろうに、連携ありき、になっている。
- ・連続した連携というのは本当に難しいと思う。中学校という立場としては、小と高のパイプ役を果たせればと思う。
- ・連携は小 中がメインに感じてしまう。保と高の部分に弱さを感じる。
- ・具体的な取り組みが見えてこない。
- ・交流する機会をもっと増やしてはどうか。
- ・特になし。
- ・連携が接続か、どこに視点を向けるか。
- ・負担感の心配。
- ・高校の存続が最大の課題。
- ・保小、中高連携が具体的に全町的に目に見える活動としていく。
- ・礼文検定、礼文学の充実。
- ・高校の先生方との交流も進み、サークル活動を通して、小中での学習力をどんなふうに高校にかなげるかみえているが、まだ小中との関係に比べて中高のつながりが不十分だと思う。言いたくても言えないこともあったりするので、礼文の子どもをどう育てるかという視点でもっとつっこんだ話し合い、連携が必要だと感じている。
- ・整理。会議が多く、その割に成果らしい成果を「これです！」と挙げられないのは良くない。町の研究会が中心となって進められているが、枝葉が多くて幹が見えていない。
- ・保育所との連携をさらに深めていきたい。
- ・保～高となっていますが、中心はやはり小中連携になっています。保育所とのつながりをもっと深め、高校とは進学問題で力合わせをしていく必要があるかなと思います。
- ・中高連携の具体的な推進。
- ・礼文町としての教員の研修システムを構築すること。
- ・小中以外の部分の連携の様子がよくわからないこと。
- ・多忙になりすぎかも。
- ・保育所との連携ができていない。交流会もあまり建設的ではない。今のままでは必要性が感じられない。就学前～入学が一番環境が変化するときなのでもっと効果の上がる連携の方法を追及するべきだと思う。
- ・連携という割には、地元高校への進学率が低すぎるのでは？

- ・礼文町における保～高連携が、礼文町の将来を担う人材の育成につながる事が課題であると思う。(0～18才(22才?)の間でどのような発達段階でどのような力をつけていくか?(礼文町にとって)どのような20才を目標とするのかを明らかにして、目標をひとつにしていくことが課題?)
- ・高とはある程度できていると思う。保・小も指導の面で、小中のような連携が少しでも多くできていくと良い。
- ・高校への入学者数。
- ・保との連携の在り方について、を中・高のメンバーがどう理解していくか。
- ・転勤等で教職員が入れ替わった時に現在の活動を維持できるかどうか。
- ・より緊密な交流。(実践を含む)
- ・反省点を活かし、どんどん良いものにしていくべき。
- ・小中連携と同じくらい活発な活動。

【参考】全町的連携教育に対する評価と自校の取り組みに対する評価の比較

項 目	全町	自校
ア 大変成果を上げている	40.0	42.0
イ 少しは成果を上げている	48.0	36.0
ウ どちらともいえない	12.0	20.0
エ あまり成果を上げていない	0.0	2.0
オ まったく成果を上げていない	0.0	0.0
無答	0.0	0.0

(単位は%)

- ・自校の取り組みに対する評価の方がやや厳しい結果になっている。

IV.2. 礼文町における「保・小・中・高」連携教育の効果と課題

小中学校の校長、教頭及び教職員による自由記述の内容を列記する。

IV.2.1. 連携教育の効果

- ・校長、教頭、教職員同士が顔見知りとなり、気兼ねなく相談できる人間関係ができる。児童生徒や保護者・PTAの関係も同様であり相乗効果を上げている。
- ・異校種における児童生徒の実態や学校の様子、学習指導や生徒指導、学校行事等の具体的内容や方法などがよくわかり、自校の学校経営や学校運営、カリキュラム作成、教育指導などに活かすことができる。9年間の教育課程編成が可能になる。
- ・学校組織・運営の活性化につながっている。
- ・児童生徒の教育指導について、共通の目標・めやすを持って指導することができる。小中学校の9年間を見通した指導ができる。
- ・各教科、総合的な学習の時間、性教育、学校予算等において、異校種間の教員と合同の研修ができ、教師力の向上につながっている。相互に刺激を受けている。
- ・カリキュラムや性教育系統表、教育条件整備計画等を共同して作成することができる。

- ・「礼文検定」や「礼文学」について、系統的・計画的な指導ができる。
- ・部活動や地域行事などの連携・協力ができる。
- ・いわゆる「中1ギャップ」⁽¹⁷⁾の解消に役立っている。小学生の良きお手本になろうとして中学生の自覚が高まる。
- ・礼文町全体で子どもたちの成長を支援しようとする雰囲気、姿勢がある。

IV.2.2. 礼文町における「保・小・中・高」連携教育の課題

- ・時間の確保と個人負担の軽減。多忙感や負担感など。
- ・目に見える形での取り組みの充実。礼文検定や礼文学の充実・改善。
- ・連携教育の視点を連携に置くか接続に置くかの検討。
- ・活動のねらいの明確化。
- ・年間計画や長期計画の作成。
- ・「足並みを揃えよう」になっていないか。「連携ありき」になっていないか。
- ・連携教育に対する熱意の引き継ぎ。
- ・研修システムの構築。
- ・地域間、学校間の熱意の差。
- ・町研活動に対する課題意識の持続。
- ・中高連携のさらなる工夫。礼文高校への進学。
- ・保育所に行っていない子どもの把握や保育所との連携。

V. 「礼文型」連携教育の特徴

全国各地で取り組まれている小中連携・一貫教育は、「中1ギャップ」の解消や特色ある教育活動の展開、学校統廃合などを目的・契機とした教育委員会主導型であることが多い。⁽¹⁸⁾ なかには首長の選挙公約によるものもある。⁽¹⁹⁾ また、その内容も実質的には、学力向上などに特化されている傾向が強い。それに対し、礼文町における「保小中高」間の連携教育は、地域の特性を生かしながら児童生徒の全面的な発達保障を目標に、関係者の創意工夫による手づくりの取り組みであり、その「地域性、現場性、独創性」が最大の特徴である。次にその具体的内容を概観する。⁽²⁰⁾

実態をしっかり踏まえている。

礼文町の学校においては、少子化等により児童生徒数が減少し、児童生徒同士がふれ合い学び合う機会が少なくなっている。また家庭や地域においても兄弟姉妹や隣近所の子どもの数が減り、家庭や地域における子ども同士の交遊も次第に少なくなっている。

これらのことは、教職員の研修にも影響し、従来からあった島外研修の困難さに加え、専門的な教科研究や複式指導の研究、養護教諭や事務職員の職務研修にも大きな影響を与えるようになった。こうした状況の中で、礼文町においては、豊かな自然や1島1町というまとまりのよさを生かしなが、町内のすべての学校や保育所、保護者、地域住民、行政など、まさに「オール礼文で」⁽²¹⁾校種を超えた連携教育を創り上げている。

なお、「礼文検定」のもとになった「香中検定」⁽²²⁾も、「生徒たちの『勉強がわかるようになりたい』という思いと、『学ぶ意欲を持たせたい』という教職員の願いを受け止めたことから始まっ

た」⁽²³⁾ というのも、生徒の実態を踏まえた実践例である。

目標、方針が明確である。

児童生徒の人間の発達を目指し、地域に根ざした教育を校種間の連携によって実現しようとする連携教育の目標は、「心豊かに学びふるさと礼文に夢と誇りをもって21世紀をたくましく生きる児童生徒の育成～保小中高の教育連携を軸にして～」という礼文町教育研究会の研究主題に端的に表れている。各学校や各地区の小中連携教育推進協議会および中高連携教育推進協議会は、こうした全町的な目標を念頭に置きながら、それぞれの実状を踏まえて教育や活動の目標を定めている。さらに、礼文町教育研究会は活動の基本方針として教師力、学校力、研究力の向上を掲げており、これらについても各学校等がその独自性を発揮しながら礼文町教育研究会の活動との関連を図り具体化している。

計画・実践・評価・改善サイクルが確立している。

礼文町教育研究会では、各年度による到達点を明らかにし、計画の全体像が見えるよう工夫ながら2次にわたり3ヶ年計画を作成している。計画の検証については、アンケート調査や部会反省、学校評価等により行い、その結果をもとに改善に努めている。各学校においても、連携教育を学校評価項目に位置づけ、自己評価や保護者評価を行い、それらに基づく学校経営等の改善・充実に努めている。また、児童生徒による評価活動にも取り組み²⁴、児童生徒の声を連携教育の内容や進め方に活かそうと努力している。

組織・運営がしっかりしている。

各学校を基礎に、礼文町教育研究会が全町の推進母体となり、香深中学校と船泊中学校を中心とした両地区の小中連携教育推進協議会が地域の活動をリードしている。各学校では、校務分掌の中に連携教育担当者が配置されている。運営面においては、それぞれの代表や責任者を中心に、構成員の意見をていねいに集約しながら共通理解を図り、共同で検討・決定し実践している。校長をはじめとする各リーダーが、積極的に指導性を発揮していること、中学校が各学校間の調整役を務めていることも特徴である。また、後述する中高連携教育推進協議会は、他市町村ではあまりみられない組織であるが、その活動を含め大きな役割を果たしている。

連携教育の内容がよく工夫されており、児童生徒の発達を見通したものとなっている。

基礎学力検定問題集（礼文検定）は、小中高教員の共同検討をもとに作成されている。この問題集には、各学年段階において習得すべき漢字と算数・数学、英語の基礎的事項が、学年進行に沿って系統的に配置されており、児童生徒にとっても、指導する側にとっても、保護者にとっても、到達目標がよく分かり学習意欲の向上や指導・支援に大変有効である。また、この取り組みは、単なる教科学力の基礎を身につけさせるだけでなく、各学校の教育課程の改善や教科指導を中心とした授業づくりに関する教員研修や学校研究の交流・研究と密接に関連しており、その相乗効果は極めて大きい。今年度、船泊地区で開催された礼文町教育研究大会の公開授業指導案に記載されている「単元構造図」などは、まさにその成果である。ここでは、例えば国語科において、「読むことに関わる小・中・高の指導要領について」として、家庭や保育園から小、中、高までの各段階における到達目標と学習内容が明示されており、児童生徒の発達に応じて、学年間や校種間をつなぐ系統的で計画的な教科指導が行われるよう研究されている。

ふるさとに学ぶ総合的な学習の時間等の連携教育（礼文学）については、系統表が作成されたことにより、各学校間のつながりや学年進行による学習内容等が明らかになり、活動の充実・発展に大きく寄与している。礼文観光大使活動や一斉クリーン作戦、礼文学発表会などの具体的活動は、地域性を活かしたきわめて独創的な取り組みである。礼文高校の学校設定科目（「高山植物」）は、礼文学の発展学習として、その教育的意義は大変大きい。

中・高の連携教育が進んでいる。

礼文高校の参加が、義務教育の段階を超えた発展的な連携教育を可能にしている。まさに、幼児から青年までの発達保障を目指している「礼文型」連携教育の象徴である。

礼文高校の校長は、町教育研究会の副会長を務め、基礎学力連携部会と礼文学連携部会に教員が事務局員として参加している。学校代表者会議にも代表が入っている。さらに「中高連携教育推進協議会」が組織されており、その事務局を礼文高校が担当し中高連携教育の推進役を担っている。全国的に公立の中学校と公立の高校の連携教育は、様々なむずかしさがあって掛け声ほど進んでいないのが現状である。さらに、最近では、高校進学時の学校生活や学業に対する不適應への対応が求められており、その具体的な取り組みとして、「中学校と高等学校が、個人情報保護をしながら、互いに情報の共有化を図り、十分な学校説明と体験入学などを行い、入学希望の生徒に学校の特色を理解させ、高等学校での不適應を事前に防止する必要がある。」と指摘されている。⁽²⁴⁾ 礼文町における中高連携教育は、礼文高校への入学者の減少という問題を抱えてはいるが、全国的に見られる中高間のギャップ（高1クライシス）にも十分対応しているものといえる。また、前述したように連携教育の内容が中高双方からの積極的な提案をもとに創られており、今後の成果が期待される。

教師の責務や教育研究の原則・基盤が明示されている。

国民に直接責任を負う見地から、事実にもとづき、すべての子どもたちに必要な基礎学力・情操・体力などを身につけさせるという教師の責務からみて教育実践と教育研究は本質的に不可分のものである。そのため、学問研究の自由と教育の自主性、教育実践の多様性という教育研究の原則を前提に、教育研究活動の基盤をどこに置くか明らかにしておくことは、きわめて重要である。そのことについて、礼文町教育研究会は、「教育研究活動の基盤は、教科指導や学級経営、生徒（生活）指導などの日常的教育実践を中心とした会員の自主的な研究活動としてのサークル活動と、公教育の場である学校を単位とした学校研究にある。」と規定し、サークル活動と学校研究の重要性と関連性を提起している。

こうしたことは、連携教育及び教育研究活動を進める基本であり、このことを共有しながら多様な実践・研究が創出されるものと考えられる。

地域に根ざし地域に開かれた「町ぐるみ」の取り組みとなっている。

町ぐるみの取り組みになるためには、学校側が保護者や地域に「開く」活動と保護者や地域住民が活動に「参加」する両面が必要である。その点、礼文町教育研究会は、教育研究活動の基本的考え方として、「礼文島という地域性をおさえた教育研究活動を構築する」ことを掲げ、基本方針として「礼文町の豊かな自然や人材を地域の主体性と創意工夫の源流として活用する」ことを掲げている。礼文学はまさにその具体的実践例である。

また、異年齢の児童生徒がペアを組み、自ら地域に出向く「校外班配布活動」は、連携教育の具

体的な姿を地域に伝えるものであり、こうした活動を通して児童生徒が学ぶことを含め、教訓的な取り組みである。礼文検定もスタート時点から保護者や町民の参加を前提としており（公開礼文検定）、地域に開かれた連携教育の事例といえる。

連携教育を支援する外部の団体、機関の動きでいえば、PTA は、本来の活動に加え連携教育についても学校側と一体的に活動している。礼文町や礼文町教育委員会は、「第5次礼文町まちづくり総合計画」や「礼文町学校教育推進計画」などに連携教育の意義や目的等を明記し、連携教育を町の生涯学習体系の中に位置づけ、ともに連携教育を推進している。予算の面でも連携教育関連予算を設け、教育研究会や学校等に対する財政的支援を行っている。礼文検定の合格者に教育長自らが出向き認定証を渡す⁽²⁵⁾ことも、教育委員会として、児童生徒や教職員をいかに大切にしているかということを示す行動であり、児童生徒や教職員の努力および連携教育を大いに激励・支援するものである。

連携教育に対する校長、教頭、教職員および児童生徒、保護者の評価が高い。

「礼文型」連携教育の最大の特徴は、前述したように実践者である教職員をはじめ、連携教育の対象者である児童生徒や保護者の評価が極めて高いことである。これは、児童生徒も教職員も受け身ではなく、自らその意義や取り組みの内容を理解し、協力・共同しながら活動していることを示している。教職員の評価結果は前述しているので、ここでは、小中学生と礼文高校の教職員や保護者による評価結果を示す。

香深中学校のアンケート調査⁽²⁶⁾では、生徒の76%が「小学生との交流は楽しいし良いこと」だと回答している。また、校下小学校の3年生以上の児童へのアンケート調査では、「公開礼文検定では中学生と一緒に取り組むのが励みになっている」88.6%、「お便りの配布やクリーン作戦を小中合同で取り組んでいることは良いことだ」95.5%、「小中合同合唱をこれからもやってみたい」88.6%となっている。また、「香深中学校の生徒は、小学生のお手本になっていたり、あこがれになっている」97.7%、「中学校に行くのが楽しみだ」88.6%と回答している。連携教育は、いわゆる「中1ギャップ」⁽²¹⁾を克服する教育活動にもなっている。礼文高校では、「保・小・中・高の連携を図り地域に根ざした学校づくりという目標は達成されているか」という項目に対し、教職員は4段階中2.5、保護者は4段階中3と評価している。⁽²²⁾

Ⅵ. 「礼文型」連携教育の課題と展望

小中学校の校長、教頭、教職員がアンケート調査に答えて自由記述した課題は、前述したとおりである。ここではそれらを含め連携教育の課題を記述する。はじめに、2009年度礼文町教育研究会総会議案にあるアンケート集約概要の一部を示す。ここに、連携教育に対する礼文町教育研究会会員の課題意識が端的に述べられているものと考え、そのまま引用する。⁽²⁷⁾

「礼文町教育研究会として進めてきた「保小中高の教育連携」については、町の教育推進計画や教育行政執行方針等にも位置づけられ、財政的支援も含め大きな支援に支えられている。また、改訂学習指導要領なども含み、今日的な教育課題にも合致している。今後も継続し、質的な発展を目指していくことが望ましい。ただし、3年間が経過していることを踏まえ、実態に即した見直し検討は必要

である。

「保小中高連携」は、「礼文のすべての先生が、島の子どもたちの成長に責任を負う」という、町民への責務の表明であり、町研の軸として今後とも大切にすべき。

日常的な連携を大切にしながら、何でも一斉にするのではなく、精選して連携して取り組めるものに取り組んでいく。

基礎学力問題集づくりや礼文観光大使活動など、一定の役割を終えた。従って、連携部会そのものの位置づけや活動内容の改善が必要である。各中学校地区の実践的な活動にシフトするのがよいと考える。

「はじめに連携ありき」「上意下達」ではなく、日常的に「教育連携」を意識しながら、できることを模索していくことが大切。

一堂に会することやイベントを企画実施することを「連携」とするのではなく、「どのような児童生徒を、最終的にはどのような大人を目指していくのか」を明確にしたうえで連携を図りたい。

「設問12」の自由記述と合わせ学校現場の課題意識は以上であり、これら課題を着実に解決していくことが求められる。いずれにしても現在取り組まれている「礼文型」の校種間連携教育は、その対象である児童生徒や保護者および実践者である校長、教頭、教職員の高い評価を得ており、P-D-C-Aサイクルによる評価・改善を行いながら持続的に発展させていくことが肝要である。とくに、今まで以上に「手づくり感」を大切にすることが重要である。さらには、連携教育が自校の教育活動や学校運営の改善および自らの職責に対する自覚と職能向上に深く関わっていることを常に確かめながら、相互に切磋琢磨することが必要である。また、礼文高校入学者の減少問題や保育所との連携、就学前の子育てや家庭教育をめぐる課題、転入および新採用教職員への引き継ぎ、リーダー養成など、当面する諸課題の解決を図りながら、保護者や地域住民、教育委員会等と連携し、礼文で生まれ、礼文で成長し続けている「礼文型」連携教育の持続的発展を図り、ふるさとの明日を担う児童生徒の育成に努めることが求められている。

VII. まとめ

「礼文型」連携教育から学ぶべきことは何か。それは、第1に、一島一町という地域の特性を生かしながら、校種を超えて連携した教育活動を実践していること。推進母体が礼文町教育研究会であること。その教育内容が生きる力としての確かな学力の基礎を育てる「礼文検定」と、ふるさとに根ざし豊かな心を育てる「礼文学」という二本柱を基本に構成され、しかも、その活動が教員等の発想を活かしながら創造的に計画され実践されていることである。第2に、こうした学校の努力を保護者や地域、教育行政がしっかり支えていることであり、第3は、この取り組みを通して「心豊かに学びふるさと礼文に夢と誇りをもって21世紀をたくましく生きる児童生徒を」育てる願いを礼文町の全町民が共有していることである。「礼文型」連携教育は、全国的に取り組まれている校種間連携教育や一貫教育に新たな視点と豊かな実践例を提起している。まさに、現場からの教育改革であり、その独創性とひたむきな努力に心から敬意を表する。

おわりに

いま、厳冬の礼文町で吉永小百合さん主演の映画「北のカナリア」の撮影が行われている。教師と教え子の話だという。木村大作カメラマンは、「美しさは厳しさの中にしかない。景色も人も。」⁽²³⁾と述べている。礼文教育もまた、その通りだと思う。その魅力に惹かれ、学力形成などを課題に引き続き調査研究を続けていきたいと思っている。

最後に、アンケート調査にご協力いただいた小中学校の校長、教頭、教職員の皆さんをはじめ、資料提供や聞き取り調査にご協力いただいた香深中学校藤間直樹校長先生、香深井小学校飯田光校長先生、船泊中学校今野亘校長先生、吉崎健一教頭先生、礼文高校佐竹卓校長先生、竹之内康秀先生、品川規雄前教育長さんに心から感謝申し上げます。とくに、2年間にわたる調査研究にご協力いただいた藤間校長先生には、重ねて厚くお礼申し上げます。

礼文教育のさらなるご発展を祈りつつ。

【資料】 礼文町における「保小中高連携教育」に関する調査（用紙）

あてはまるものを で囲んでください。

勤務先	小学校	中学校			
職 種	校長	教頭	教諭	養護教諭	事務職員

1. 現在、礼文町では、どのような保・小・中・高連携教育に取り組まれていますか。町全体または各地区の連携について、取り組まれている内容を具体的に書いてください。
2. 礼文町全体で取り組まれている保・小・中・高連携教育について
(あてはまるものを で囲んでください。)
(ア) 大変成果を上げている (イ) 少しは成果を上げている (ウ) どちらともいえない
(エ) あまり成果を上げていない (オ) まったく成果を上げていない
3. (ア) または (イ) と回答された方は、成果と思われる具体的内容を書いてください。
4. (エ) または (オ) と回答された方は、その理由を書いてください。
5. 現在、あなたの学校で取り組んでいる小・中連携教育の成果について
(あてはまるものを で囲んでください。)
(ア) 大変成果を上げている (イ) 少しは成果を上げている (ウ) どちらともいえない
(エ) あまり成果を上げていない (オ) まったく成果を上げていない
6. (ア) または (イ) と回答された方は、成果と思われる具体的内容を書いてください。
7. (エ) または (オ) と回答された方は、その理由を書いてください。
8. 現在、あなたの学校で取り組んでいる小・中連携教育とあなたのお仕事(学校経営、教育活動、校務分掌など)との関係について(あてはまるものを で囲んでください。)
(ア) 大変良い影響を受けている (イ) 少し良い影響を受けている (ウ) どちらともいえない
(エ) あまり良い影響を受けていない (オ) まったく良い影響を受けていない
9. (ア) または (イ) と回答された方は、その具体的内容を書いてください。

10. (エ) または (オ) と回答された方は、その理由を書いてください。
11. 礼文町における小中連携教育の今後の課題を挙げてください。
12. 礼文町における保・小・中・高連携教育の今後の課題を挙げてください。

● 註・引用文献

- (1) 北緯45度70分14秒、東経141度41分16秒、北海道稚内市の西方60kmの日本海上に位置する日本最北の島。人口2,950人(2011.9.30現在) 主な産業は漁業と観光。夏には約300種類の高山植物が咲く花の島。利尻礼文サロベツ国立公園。
- (礼文町 Web ページ <http://www.town.rebun.hokkaido.jp/> 2012.01.02)
- (2) 町立保育所2、町立小学校4、町立中学校2、北海道礼文高校
- (3) 礼文版基礎学力養成問題集による検定の略。漢字は、小学1年から高1まで、算数・数学は、小1から中3までを20段階に区切ってあり、学年進行に沿って系統的に学ぶことができる。英語は、中1から中3までの10段階。
- (礼文検定認定証) 小中高の教員が共同で問題集を作成している。小学生や町民も受検できる。
- (4) ふるさと礼文を教材にした地域学習。総合的な学習の時間を中心に、それぞれの発達段階に応じながら、自己理解を深め、生き方を考えることやふるさと礼文の環境・自然、産業・経済、文化・伝統、福祉・社会などについて学び体験する。観光大使活動などはその一環。
- (平成20年度「礼文学」の内容系統表)
- (5) 平成21年度「礼文の教育連携」(礼文町教育研究会発行リーフレット)
- (6) 礼文町立香深中学校校長藤間直樹氏『香深地区小中教育連携の歩みと礼文町の保小中高教育連携』(平成20年度～平成23年度) 2011.09 以下同じ。
- (7) 2010.6.8 第2回香深地区小中連携協議会
- (8) 2011.3.4 船泊地区小中連携教育推進協議会
- (9) 2011.12.1 「第4回船泊地区小中連携教育研究会実施要項(案)」
- (10) 2011.11.7 香深地区研修プロジェクト「ドリームマッチ予定表」
- (11) 本稿4ページ以降、連携教育に対する評価結果を参照
- (12) 2010.5.31 第1回礼文町中高連携教育推進協議会
- (13) 礼文町の子どもから高齢者までが一堂に会し芸能発表などを楽しむ集い。保育所の園児や小中学生、高齢者が出演する。小中学生187名による合唱がある。(平成23年度「はちまる交流会」プログラム)
- (14) 2010.7.20 第2回礼文町中高連携教育推進協議会
- (15) 2011.12.5 第2回礼文町中高連携教育推進協議会
- (16) 香深井小学校だより『カフカイ』2009.11.26 第148号、2011.12.1 同第177号
- (17) 新潟県教育委員会2006.9『中1ギャップの解消に向けて』(中学1年生でいじめや不登校が増加する現象)
- (18) 品川区教育委員会2005『品川区小中一貫教育要領』講談社 2ページ
- (19) 広島県府中市の例(2007.9視察)
- (20) この項は「平成21年度礼文町教育研究会総会議案」及び「平成23年度第2回礼文町教育研究大会開催要項」から引用
- (21) 品川規雄前教育長インタビュー(2010.10.13)
- (22) 香深中学校で実践された小1から中3までの漢字、計算、英単語の基礎学力習得を目指す検定。香深中学校長藤間直樹氏インタビュー(2010.10.13)
- (23) 香深中学校長藤間直樹氏インタビュー(2010.10.13)
- (24) 文部科学省2010『生徒指導提要』190ページ32行
- (25) 品川規雄前教育長インタビュー(2010.10.13)

- (26) 香深中学校長藤間直樹氏(2011.11.15、同12.5実施)
- (27) 2011.11.8 礼文高校「本校の学校評価」
- (28) 2009年度礼文町教育研究会総会議案4ページ1行
- (29) 2011.12.8 北海道新聞(夕刊)

●参考文献

- ・古川碧2009『子どもの声と地域性を生かした小中一貫教育の現状と展望』稚内北星学園紀要第10号
- ・稚内市東地区3校小中一貫教育実践報告会発表資料2011.2.2
- ・文部科学省2008『中学校学習指導要領』東山書房
- ・文部科学省2010『生徒指導提要』教育図書株式会社
- ・玉井康之著2009『学校評価時代の地域学校運営』教育開発研究所
- ・岡崎友典 高島秀樹 夏秋秀房著2008『地域教育の創造と展開』放送大学教育振興会
- ・葉養正明編1999『学校と地域のきずな』教育出版株式会社
- ・児島邦宏 佐野金吾編2006『中1ギャップの克服プログラム』明治図書
- ・石川晋 石川拓 高橋正一著2009『中1ギャップ』学事出版
- ・上川町中高一貫教育推進委員会 北海道高等学校教育経営研究会 編著2004『豊かな中高一貫教育を創る』学事出版
- ・品川区教育委員会2005『品川区小中一貫教育要領』講談社
- ・名古屋大学教育学部教育研究室2006『地域教育経営に学ぶ』第8号
- ・同上2007第9号
- ・同上2010第12号
- ・北海道礼文高校『平成23年度学校要覧』
- ・北海道礼文高校前教頭田尻勝敏氏2008『教職10年研修発表資料 礼文型保小中高連携教育について』
- ・礼文町立香深中学校『平成22年度香中の教育』
- ・礼文町立船泊中学校教頭吉崎健一氏2011.11.15『発表スライド資料 船泊地区小中連携について』

●英文タイトル

The effects and prospects of "the cooperative education by nursery, elementary, junior-high, and senior-high schools" in the town of Rebun, Hokkaido

Based on the self-evaluation by the staff, including principals and vice-principals

●英文要約

This paper aims to study the effects, problems, and prospects of "the cooperative education by nursery, elementary, junior-high, and senior-high schools" in the town of Rebun, Hokkaido. The study is based on the self-evaluation by the teaching and clerical staff, including principals and vice-principals, who are mainly responsible for its practice. The Rebun cooperative education is highly original in its goals, contents, organization, etc.

Taking advantage of its locality, the whole town dedicates itself to the education, hoping, among other things, that all pupils/students will grow up quickly and healthily. It is noteworthy that the prefectural senior high

school is involved, too. Also unique is the fact that this cooperative education is led by the Rebun Educational Board.

This project has been valued highly, partly because all of those concerned use their heads, exchange ideas with each other before practicing the education: 88 percent of the elementary and junior-high school staff, including principals and vice-principals, say that the education has produced excellent results.

The problems that need to be addressed from now on include: (1) utilizing these results to improve/enrich the curricula, educational activities, and management of respective schools, and to develop each member's professional ability, (2) training next-generation project leaders, and (3) solving the senior high school-related problems. It should be kept in mind that the primary concern is, at all times, the change (growth/ development) in pupils/students in evaluating the project.

● **Keywords**

the Rebun-type cooperative education

certification test of "Rebunology"

"Rebunology" (Rebun studies)